

富良野の異形屋根 THE DEFORMED ROOF HOUSE OF FURANO

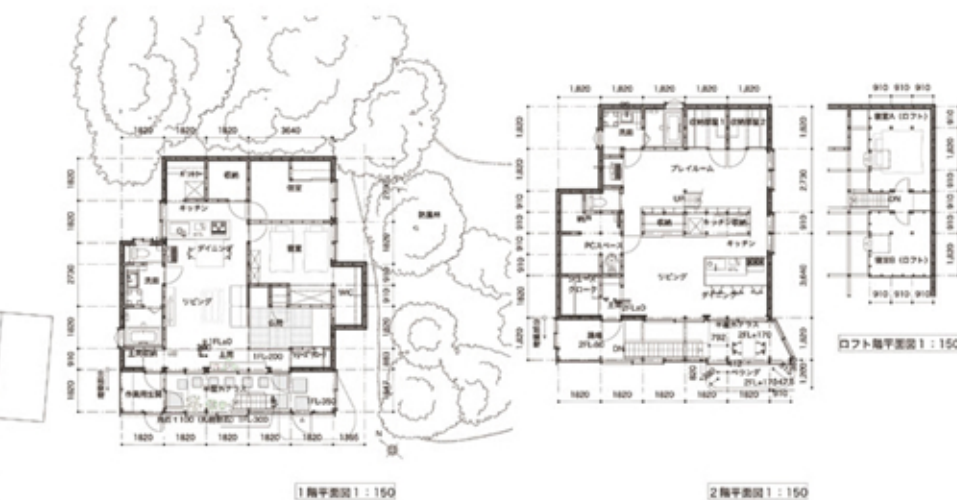


富良野の異形屋根～北海道民家のマニエリスム

1974年に建てられた農家住宅を二世帯にリノベーションする計画である。異形屋根と称するこのような住宅は、北海道では馴染み深いとも言えなく、道外では見たことがない。それらアノミナスな民家は北海道

建築の奇想、マニエリスムと言っても過言ではない。（右下の考察を参照）今まで注目されなかった北海道民家のエアポケットに光をあて、それを次の世代に継承していくことが計画のベースとなった。

改修は1階を親世帯、2階を子世帯とし、必要所室を満足させるためには増築の必要があった。断熱改修と構造補強のためスケルトンまで解体し、異形屋根形態をトレースして妻側に半屋外空間を増築した。増築部分は親子世帯を緩やかに繋げ、テラス、風除室、アクセス空間などの機能を兼ね備える。農家に不可欠な土間でもあり、職と住を横断する空間ともなっている。地域では馴染み深い農家ハウスの印象を重ね合わせたこの半屋外空間は、建築コストを抑え、温室の環境特性によって厳しい冬にでも太陽光から熱を作り出すことができる。それゆえ、この地域に即した新しい環境デザインとしての側面も持つことになった。増築部の構造は105x180@1820で柱が立ち、耐風圧を柱の長手方向で受けることで構材をなくす。決定された構造デザインに（ある意味強引に）プランを重ね合わせることでテラスや開口にズレが生じ、アップグレードされたマニエリスティックな様相が建ち現れた。現在、この家にはぬいぐるみや様々なもので溢れかえり異形の家に負けない力強い生活感にみながっている。



北海道における屋根形状の変遷とその考察

北海道近代民家史を簡単に振り返ると1950～60年代に三角屋根（※1）の様式が確立し、後を受けた異形屋根（※2）の時代は60年代から10年ほど続いた。異形屋根様式が発生した理由について調べると、事件現場より多く、多くの想作品が散らばっていた。一例には板金技術の向上である。それが異形屋根を作りえる一つのベースであった事は確かだが、様式変化の本質的理由とは言えない。そして他の想作品からも、それにたどり着くことはできなかった。果たして、この様式変化の原因は何なのか？

もっと俯瞰して人類史の視点で考えてみる事にする。例えばルネサンスのような「自立した様式の概念」ではなく、「それからのズレとして定義される概念」であるマニエリスムだとすると整理がつくのではない。そしてそれは人類が歴史的に繰り返す概念でもある。近代でいうモダンとポストモダンの関係の様に、三角屋根から異形屋根に至る様式の推進力をマニエリスムであると位置づけることは、それほど乱暴な話ではない。つまり異形屋根は北海道民家史におけるマニエリスムと言えるのではないのか？

三角屋根の時代の街並み



異形屋根の時代の街並み



様々なタイプの異形屋根

